天草下島におけるスギザイノタマバエの分布

林業試験場九州支場 大河内 勇
林業試験場北海道支場 吉 田 成 章

1. はじめに

スギザイノタマバエは1956年には鹿児島・宮崎の二県にのみ分布していた[1]。以来，その分布域を拡大し，1978年3～10月の九州全域の分布調査によれば，大分県・福岡県の南部にまで達している[4]。このように，本種の大まかな分布域の拡大は知られているが，その詳しい様子は明らかでない。分布拡大の詳細を知るためには，分布しなかったことが確認されている地域への本種の侵入と定着の詳しい調査が必要である。

天草は上島・下島ともに，1978年の調査では本種は発見されなかった。その後，1980年に熊本県の坂下氏と源島氏によって，下島の角山（角岳）山頂付近で本種の生息が確認された。そこで，侵入初期と思われる天草下島の本種の分布域を明らかにするために調査を行なった。その結果を報告する。なお，調査に際し便宜を計っていただいた熊本県の上記両氏および滝下国利氏（当時熊本県林業指導所）に厚く御礼申し上げる。

2. 調査期間および方法

1981年3月30・31日，5月19・20日，6月30日に調査した。6月30日の調査時点では第一回目の発生が終わっていたが，この時の調査地域内には本種の生息が確認された所はなかった。従って，この調査では1980年の分布域を調べたことになる。

調査は，自動車で島内を移動し，比較的道の近くにあるスギ林で本種が生息していそうな林に入り，数本のスギの地際付近の外樹皮を剥皮して皮紋の有無を確認した。地際付近を剥くようにしたのは，侵入初期の林分では皮紋は地際付近にだけ見い出されるという報告によった[2]。分布域の外縁を明らかにするために，分布域の外側に分布していない地域があることを確認した。

3. 結果および考察

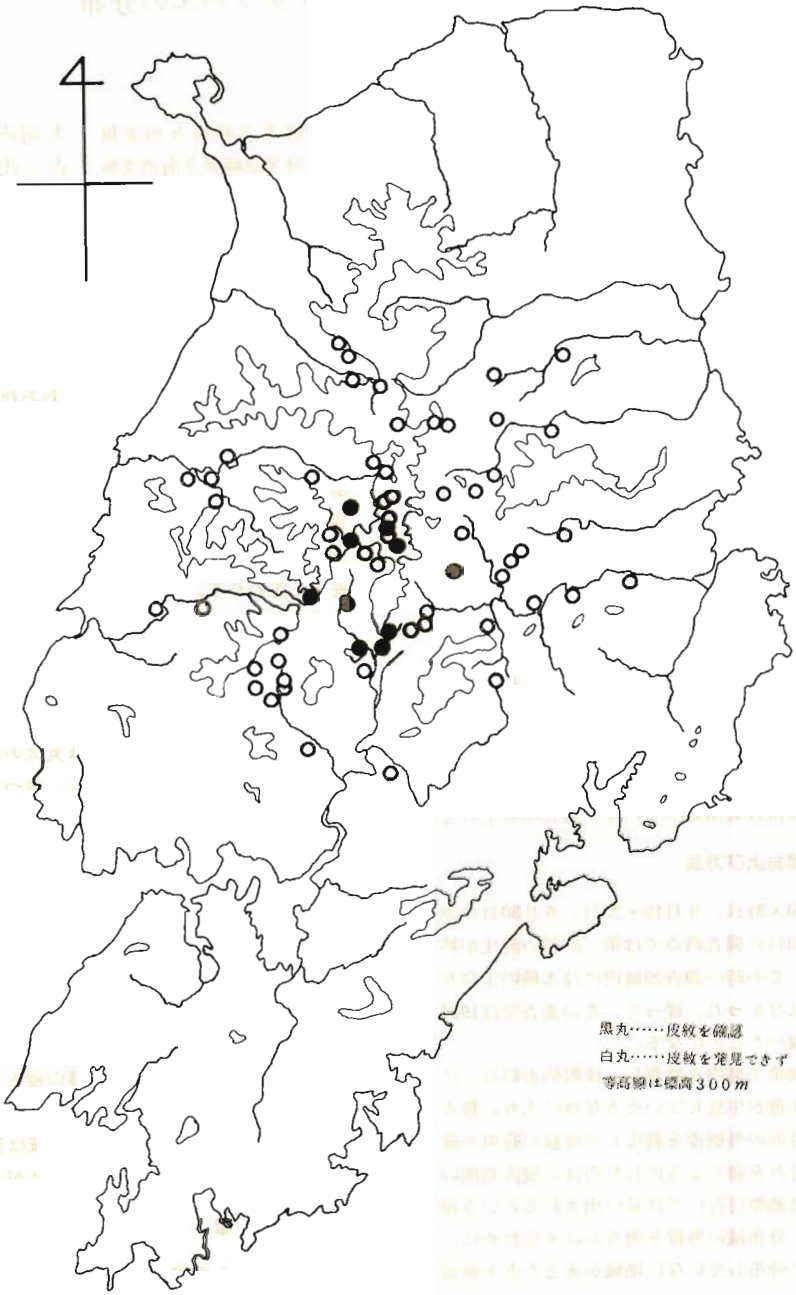
調査の結果，本渡市，河浦町，天草町で皮紋が確認された。天草下島のほぼ中央部，東西4Km，南北4Kmの地域である。これを図－1に示す。分布域の中央には矢筈岳（478 m）がある。分布が確認されたスギ林で最も標高の高いのは角岳山頂付近（450 m），最も低いのは矢筈岳南麓の今田川流域（80m）であった。島の中央部にのみ発見されたとはいえ，標高の高い所でだけ発見されたわけではない。調査地域内の点の粗密は調査数の違いにもよるが，おおむね道路周辺のスギ林の分布によっている。下島には大面積のスギ林地帯がほとんどなく，スギ林は沢沿いに点在する傾向があった。今回確認された分布地点のいくつかは1978年当時の調査では分布していなかったことが確かめられた場所であり，侵入の時期は1978年以降と考えるのが妥当と思われる。侵入した場所は，現在の分布域の中に違いないが，侵入した時期・場所についてこれ以上の詳しい推定はできなかった。

1978年の調査によれば下島に最も近い生息地は水俣市付近と宇土半島である。それが下島の中央部に突然侵入した。理由としては皮つき丸太の移入による可能性が高い。今回の調査の時にも，皮つきのスギ丸太を運んでいるトラックを見ている。しかし，下島の分布域内には皮つき丸太を運び込むような工場などは見かけなかった。そのため，成虫の遠距離の飛来による分布拡大の可能性も残る。

従来，スギザイノタマバエの分布拡大の速度は年間約8Kmと言われていた[3]。今回の天草下島への侵入は，この速い分布拡大が飛び火的に起ったものではないかと疑わせる。本種の分布域に接している地域ばかりでなく，多少離れた地域でも本種の侵入を警戒する必要があろう。また，皮つき丸太の移入がその原因であるとすれば，陸路で運ばれている地域は相当な遠距離であっても本種の侵入を受ける可能性がある。

引用文献

(1) 小田久五：暖帯林(9)，33～43，1957
(2) 高橋和博・堀田隆：日林九支研論33，99～100，1980
(3) 吉田成章：林研12(7)，5～10，1975
(4) ――――他：日林九支研論32，293－294，1979



図－1. 天草下島におけるスギザイノタマバエの分布